

# 大名藩邸における御守殿の構造と機能

——綱吉養女松姫を中心に——

氷室 史子

はじめに

武士の家には、政治が行われる空間である「表」と、当主の私的生活や女性の生活空間である「奥」があるとされる<sup>(1)</sup>。実際、将軍家や大名家、そして幕府にとって陪臣である大名家臣の家においても、格の高い武家の屋敷では、「表」と「奥」は空間的な住みわけがなされていた。「御守殿」は、大名家の「奥」とは別に建造された御殿であり、将軍の娘の大名家入興後における生活空間である。「御守殿」は、将軍の娘とはいえ、藩主夫人、又は継嗣夫人の生活空間であり、基本的には「奥」の一種であると言える。

近年、近世幕藩体制下の「奥」の問題は、ジェンダーの視点から積極的に論じられてきている。長野ひろ子氏は、江戸幕府成立期の女性の活躍、幕藩制国家のなかでの女性の位置付け、そして、幕末から維新後の女性の動向について、女性の政治的関わりを中心に論じている<sup>(2)</sup>。

女性の政治への関わりは、幕府成立期に多くあり、幕藩制が安定すると範囲が限られたものになっていったという。そ

これは、儀礼的側面なのであるが、公的儀礼が幕藩制国家支配の維持・安定化に一定の役割を果たし、政治的性格を帯びたことを指摘しつつ、やはり「表」と「奥」には違いがあるとしている。事例に挙げられていたのは、寛政期の御台所（一代家斉夫人、近衛（島津）寔子）と、同期の大奥女中のみである。それ以前や、他の將軍家、大名家については述べられていない。

大名家の正室の儀礼に関しては、柳谷慶子氏が仙台藩伊達家について論じている。<sup>(3)</sup> それには、「表」の公式行事の贈答対象に、藩主と継嗣に並んで正室が含まれていたという。また正室は、節句や將軍家・大名家の祝儀において將軍夫妻との贈答をおこなっていたことも指摘されている。同じく伊達家の女性を扱ったものでは、松崎瑠美氏がいる。<sup>(4)</sup> 幕藩体制成立期から中期の女性の動向について明らかにしている。

そして、女性の職場としての「奥」の研究は、奥女中に関するものがあり、松尾美恵子氏・長野氏・畑尚子氏が挙げられる。そこでは、將軍家や大名家の個々の「奥」における、女中の職制や俸禄を「表」の家臣団と比較して述べられている。<sup>(5)</sup>

「御守殿」についての先行研究は、御殿の空間構造に関して、宮崎勝美氏の「紀尾井町遺跡調査報告書」があげられる。五代將軍徳川綱吉の息女鶴姫の「御守殿」を中心に、同じく綱吉養女松姫・八代吉宗養女利根姫・十一代家斉息女溶姫の、御殿全体の規模について述べられている。御殿内部の部屋や、長局向き（女中の生活空間）の構造、女中に関しては、規模を知る手懸りとして言及されている。<sup>(6)</sup> また、三代家光息女千代姫（尾張徳川光友室）の御守殿に関しては、渋谷葉子氏が尾張徳川藩邸成立の研究の一部で、普請について触れている。<sup>(7)</sup> ただし、これらの主な論点は御守殿そのものの解明ではなく、御守殿と表御殿（大名藩邸）との関係や、御守殿内部にかかわる人々の動向には及んでいない。

本論は、これらの先行研究をふまえ、あまり触れられてこなかった、將軍の娘の「御守殿」における空間構造、贈答儀礼・交際、そしてそれらに関わる人々の実態解明を試みるものである。それにより、ジェンダーの視点に捕らわれず、御

守殿が大名藩邸にもたらした影響や、幕藩関係における役割を見出していきたい。中心事例には、五代將軍綱吉の養女松姫をとりあげる。松姫は尾張家から將軍の娘として、宝永五（一七〇八）年、加賀藩前田吉徳（松姫死後六代藩主）に入興した。

將軍の娘の縁組は、初代家康・二代秀忠の時代には、諸大名の徳川方への取り込みや、將軍権力強化の一環として行われ、三代家光・四代家綱期には大名の家格・身分序列との関わりがより重要視されるようになっていった。松姫の養父、五代綱吉の時代は、直系以外の將軍であったこともあり、高い格の公家から養女を迎え、大名家へ入興させることで、將軍権威を示そうという、家格への強い意識がみられる。

## 第一章 御守殿の空間構造

### 第一節 御守殿の成立と構造

將軍の娘は入興後、大名江戸藩邸内に、既存の奥とは別に建てられた、御守殿と呼ばれる御殿を住まいとした。御守殿という呼称は、武家建築の主殿から由来していると言われている。また、江戸時代初期から中期の御台所（將軍正室）の生活空間にも、御守殿または御主殿の文字が見られる<sup>(8)</sup>。しかし將軍の娘の御殿に、いつから御守殿という言葉が使われたかは定かではない。松姫が入興した加賀藩の、四代藩主前田光高の正室大姫（三代將軍家光養女）の代から、大名正室として將軍の娘も江戸在住となった。大姫の御殿の一部が「御守殿」と呼ばれた可能性はあるが、全体の呼称であったかは特定できない<sup>(9)</sup>。大姫の入興の六年後に、尾張二代藩主徳川光友に入興した家光の娘、千代姫の住まいは「御守殿」と称されている<sup>(10)</sup>。千代姫の頃から將軍の娘の格式が整えられたといわれており、この頃から入興後の御殿を「御守殿」と呼ぶよ

うになったと考えられる<sup>(11)</sup>。

また、御守殿は相手が三位以上に入興した場合で、それ以下を「御住居」と称したといわれている<sup>(12)</sup>。しかし、享保年間までの事例で、実際に入興時点の婚姻相手が三位以上であった例はなく、この時期にはいずれの場合も「御守殿」と称している<sup>(13)</sup>。

それから時代が下って、十三代藩主斉泰に入興した十一代將軍家斉の娘、溶姫の住まいは、始め「御住居」と称されていた。「御守殿」に変わったのは、斉泰が中納言に昇進した後である。中納言は従三位に相応する官職であり、前田家から「御住居」から「御守殿」への変更を願った結果であった<sup>(14)</sup>。他にも「御守殿」の称は、紀伊徳川七代藩主宗将夫人の御殿の呼び方であったことが確認できる<sup>(15)</sup>。

「御守殿」と「御住居」は、厳密に区別されていなかったのではなく、「御守殿」の下に「御住居」という格ができ、区別がなされるようになったのは、十一代將軍家斉の息女からであったといえる<sup>(16)</sup>。

では、將軍の娘の住まいである御守殿は、どのようなものであったのだろうか。まずは、その規模であるが、各々の御守殿の規模は統一されてはいなかった。入興先の大名藩邸の規模にもよるだろうが、いずれも藩邸内の面積の六割は御守殿が占めていた<sup>(17)</sup>。そして、御守殿は藩邸全体の「表」と「奥」の区分からいえば「奥」空間に属しているが、御殿内部にさらに「表」と「奥」を有する構造になっていたのである。

実際の内部構造は、松姫と溶姫の御守殿絵図から知ることができる（図①・②・③・⑤参照）。図①から図③は、松姫御守殿の絵図である。図①は、「光現大夫人御守殿御間絵図」より作成されたもので、図②は「御守殿廻惣御絵図」から作成し、図①の詳細を明らかにしたものである。図③は、図②の御守殿表向きを拡大したもので、松姫御守殿をめぐる空間構造、男役人の御守殿内の構造を論じる上での参考にしていく。また、図④は溶姫御守殿が加賀藩江戸藩邸に存在した当時の全体図である。図④の御殿空間を拡大したものが、図⑤となる。御守殿の藩邸内での位置関係や、松姫御守殿との

比較対象に使用する<sup>(18)</sup>。

松姫の御守殿は、その規模の比較対象となる表御殿が、松姫御守殿の絵図に一部描かれているのみで、全体を知ることができないが、御守殿門から土蔵地を含めて約九千坪であった<sup>(19)</sup>。その松姫の御守殿絵図をみると、表向きは広大な広間があり、使者を迎え、饗応することが可能な空間である玄関と客間、そして膳所を備えていた。また、膳所は表御殿とは独立して食材を調達し、町人の出入を許していたことが、構造から推測できる（図③参照）。一方、溶姫の時代になると、役部屋や広間（御客間と御次）が縮小され、膳所は御守殿（御住居）と表御殿の間にあり、町人の出入の様子は伺えない（図⑤参照）。御守殿と御住居の格式の違いによるものか、前田家・幕府における御守殿の位置づけの変化によるものか、検討を要する。

御守殿の奥向きは、將軍の娘の生活空間・女中詰所の御殿向と、女中の居住空間である長局向に区別される。御殿向には、私的生活空間の他、奥向きの客間や膳所・物置も充実していた（図①・②参照）。それに加え、松姫の御守殿には表御殿との間に、御守殿からのびた一本の廊下でつながれた地震之間があった（図①・②参照<sup>(20)</sup>）。溶姫のものは、御守殿内ではなく、心字池に面して独立したものが建てられた。表御殿には地震之間は見受けられない。地震に対して、將軍の娘の安全を考慮していたのではないだろうか。

そして、長局向きである。御守殿の長局は大奥の長局に倣い、一ノ側・二ノ側・三ノ側と分けられており、一つの局に二、三人が同居し、総二階の造りであった。そこには女中衆だけではなく、女中が雇う又者とともに居住していた<sup>(21)</sup>。松姫の御守殿長局も、いずれの局にも階段があり、総二階であった。これらの部屋の多くは穴蔵を有しており、地下室を利用して防災対策を行っていたことも分かる<sup>(22)</sup>。

御守殿も藩主夫人の住まいと考えると、「奥」の一種である。大奥に広敷向という、奥向きの男役人が詰める空間があるように、「奥」にも男役人が出入する空間があった（図⑤参照<sup>(23)</sup>）。だがその空間は一部であり、表向きのように、役部

屋の他には広間・式台などはなかった。それに反し、御守殿は表向きと奥向きが備わった御殿であり、表向きには役部屋の他に、客間や接待のための膳所が設けられていた(図②参照)。

では、大名藩邸の中においては、このように表向きと奥向きの要素を備える御守殿はどのような存在であったのだろうか。大名江戸藩邸、特に上屋敷には、江戸における藩の中枢の諸機構と、藩主とその家族が居住する空間の殿舎がある「御殿空間」と、江戸詰の藩士やその又者が居住する「詰人空間」があった(図④参照<sup>24</sup>)。松姫・溶姫御守殿の両絵図からも分かるように、「御殿空間」は藩邸内においても、堀や門で周囲から仕切られていた。それは、藩邸外だけではなく、「御殿空間」を囲む「詰人空間」に対しても同様であった。この二重に囲まれた「御殿空間」と、その周囲の「詰人空間」という構造を持つ大名藩邸を、吉田伸之氏は「城下町の藩主の御殿と家臣の屋敷との二つの要素から成る武家屋敷地の構成と相似たものであるといえよう」と述べている<sup>25</sup>。そして、この構造は城下町の家臣の屋敷や、江戸城を中心とした江戸の町にも当てはまるという。その構造の特徴は、江戸城・藩邸内の御殿空間・城下町における城郭など、幕藩体制の支配構造における、支配権力の所在を一つの核として明確に示す空間であったことである。

そのような江戸藩邸の御殿空間内に、御守殿は建造された。それは、藩邸内に一つであるはずの核が二つになることを意味していた。一つ目の核は、城下町における、城郭の意味を為す、藩主の居住空間と政治的機能を備えた表御殿である。二つ目の核となった御守殿は、いわば將軍権力の象徴である江戸城から藩邸に持ち込まれた、幕藩関係の表象のような存在であった。

江戸藩邸にあらわれる空間構造は、空間に属する人々の社会構造を象徴するものであることも忘れてはならない。空間を仕切ることにより、万人の自由な出入りを防ぎ、属する社会を明確に示していたのである。御守殿が二つ目の核と成り得るのは、御殿の主が將軍の娘だけだからではない。表御殿とは別に、独自に閉じた空間で幕府や大名から使者を迎え、町人らの出入りを許し、外の世界にも通じ、表と奥がそれぞれの役割を果たした、御殿機能を有した完結した御殿であっ

たからである。そして、御守殿の御殿空間に属する人々は、これまでの大名江戸藩邸内とは異なり、男女幕府役人が常駐し、表向きにおいては藩士と幕府役人が同空間に存在するという状態を生み出したのである。

## 第二節 御守殿内の女中と男役人

### (一) 御守殿付男役人

前節では、御守殿をめぐる空間構造の特徴を指摘した。それは、大名藩邸における「奥」であるはずの御守殿が、表と奥を有しており、ただの女性の生活空間として存在していたのではなく、空間構造や独自に幕府閣僚を迎える点においても、二つ目の核として大名藩邸内に幕府権力を出現させていたことである。この御守殿の機能を維持するために、御守殿内表向きには男役人、奥向きには奥女中が配された。

御守殿付の男役人は、幕府から付けられた者と、前田家から付けられる者に分かれる。松姫入輿に際して、幕府からの主な役は、用人川副新右衛門・医師岡丈庵・用達三宅忠七郎・同朋村塚道阿弥が命ぜられた。<sup>(26)</sup> 用人は、前田家から「御家老」とも呼ばれた、御守殿表向きにおける重役である。他の役は、史料によって多少の違いがあるが、およそ侍衆六人・台所衆(頭一人・組頭二人を含む)八人・小間遣七人・小人四人・輿舁二十人の計四十八人が付けられたとされている。<sup>(27)</sup> 幕府からの役人に関しては、俸禄の問題が挙げられる。幕府と婚家のどちらが支払ったかという問題である。幕府が役を命じた際に、川副新右衛門は千石の加増をうけて、千五百五十石となった。<sup>(28)</sup> この時、他の役人、岡丈庵・三宅忠七郎・村塚道阿弥への加増は見られない。松姫が入輿した後に、前田家の史料には「姫君様御附人へ御合力米左之通被遣、於御守殿奥村伊豫申述、千石 川副庄右衛門殿。百五十石 三宅忠七郎殿。判金七枚 岡丈庵。百石 上村彦右衛門殿」

とある。<sup>(29)</sup> 前田家から江戸家老奥村伊豫守を通して、用人・用達・医師・台所頭へ、合力米が遣わされたことが分かる。上村彦右衛門に代わって用人となった、大岡三郎右衛門の幕府からの加増は五百石であった。だが、前田家からは「大岡三郎右衛門殿へ千石被遣候段、横山監物於御守殿演述」とあり、<sup>(30)</sup> 川副新右衛門と同様の千石が遣わされた。その後の用人、齋藤長八郎も幕府からの加増とは別に、前田家からは、「松姫君様御用人齋藤長八郎殿へ、御合力千石被遣段、於御守殿図書申述、去年ノ分より被遣候段申述」とあり、千石が遣わされた。<sup>(31)</sup>

松姫付役人については、これまでの事例から検討する限り、幕府は幕府で加増をし、又は、そのままの高での役替えを行っていることが分かる。そして前田家からは、幕府の加増とは関係なく一定の役料を、幕府側役人に支給していたといえる。

加賀藩からの御守殿付役人は「護国公御年表一」によると、番人として馬廻組から十五人、馬廻組の他に金沢から十八人があてられた。役掛は、諸事用達(用人)が二人・用達四人、内二人は表門と女中の通行改めの切手支配を命じられた。裏門には四組の足軽があてられた。他に、与力十一人・御徒八人・足軽四十人・小者八十人の計百八十二人(組付足軽を除く)が御守殿の役を勤めたとある。<sup>(32)</sup> 重複する部分を除くと、「御守殿雜志一・上」からは、横目二人・裏門上番二人・算用組三人・料理人六人・錠口番人十七人の名前がさらに見える。<sup>(33)</sup> それらを足すと、総勢三百人以上、後に百人が加えられた前田家士が御守殿の役についたのである。ただし、綱紀の参勤交代によって、江戸藩邸内の人数は変動したため、常時この人数がいたわけではない。そうであっても、前田家側の人数が多数を占めていたことに変わりはない。これら前田家側で重要な役を担っていたのは、用人杉江奎左衛門・同戸田清太夫・用達横山喜太夫・同土田甚右衛門の四人である。彼等には、幕府からの役人部屋のある区域に、部屋が与えられている。<sup>(34)</sup> 特に、杉江奎左衛門と戸田清太夫は、前田家側の役人であるにもかかわらず、武鑑に記載されるほどであった。<sup>(35)</sup>

表向き役人は、幕府からの者に比べ、前田家側が圧倒的に多いことが明らかとなった。幕府側の役人が、すべて御守殿



内に役部屋を与えられているのに対し、前田家側は台所役人を中心とした一部の者と、用人・用達だけであった。<sup>(36)</sup>それは、前田家の役人の多くが、門や料理に関する下役を勤めていたためであると考えられる。

では、幕府側の役人は、どのような役を勤めていたのだろうか。表御殿との関係において、用人川副新右衛門は、表御殿からの用向きの使者を受け、用達の三宅忠七郎は、御守殿側の使者を勤めていた。<sup>(37)</sup>ただし、年頭儀礼の使者は、用人川副新右衛門が勤めた。<sup>(38)</sup>この場合の表御殿側の使者は、家老や藩主綱紀が直接赴くこともあった。川副と三宅の両人は、使者の他にも「御伺」があった。<sup>(39)</sup>御守殿の関わる物事の処理を相談していたのである。その際、前田家が御守殿側の意向を聞きたい時は、直接幕府側役人へ使者を遣わすのではなく、前田家側御守殿付役人を通していた。そして、前田家側御守殿付与力・徒（御守殿の御殿外の門の役についていた）の動向の指示は幕府側侍衆へ仰いでいた。この場合は、前田家側用人を通さず、直接聞くことができたようである。<sup>(40)</sup>

このように、幕府側役人と前田家側役人が、同じ空間に常時詰めている状態であった御守殿においては、幕府側役人が前田家側役人を統括していた。そのなかでも、幕府側用人は、前田家側から「御家老」と呼ばれ、頂点にあった。前田家側用人は、御守殿と表御殿をつなぐ役割を担っていたのである。

幕府・前田家両御守殿付役人には、御守殿内に役の詰所と部屋を与えられていた者もあったが、多くは御守殿内の部屋はない。幕府側役人の下部屋には、湯殿がついていたことが確認できるが、宿直のためか、居住していたかは定かではない。

大名江戸藩邸内は、「御殿空間」と「詰人空間」とに分かれており、前田家側役人は常からある「詰人空間」内に居住していたのだろう。幕府側役人に關しては、大姫の入輿の際には「牛籠に數千歩の御屋敷相渡り、長屋をたて、御姫君様之御用人數百人居住す」とある。<sup>(41)</sup>松姫付幕府側役人は、そのような土地を与えられていないため、広大な加賀藩本郷屋敷内の「詰人空間」に住居が建てられた可能性がある。もしそうであれば、「御殿空間」内だけではなく、「詰人空間」にも

前田家より上格の幕府側役人が常にいるという状態となるわけである。空間構造に付随する、御殿空間内の通常の秩序に入り込んだ異質な社会構造が、詰人空間内にも出現することになるが、これは史料的裏づけが乏しいため、推測にとどめたい。

## (二) 御守殿付女中

御守殿付女中は、御守殿長局に居住していた。長局の広さは、御守殿全体の半分に近い。それほどまでの広さを要したわけには、女中の人数が関係していた。御守殿付女中の人数とその俸禄に関しては、「御守殿雜志一・上」にある、松姫入輿前の書付「松姫君様御附属之女中」より作成した表①、『鹿児島県史料旧記雜録追録三ノ二』より作成した竹姫付女中に関する表②、宮崎氏「紀尾井町遺跡における大名屋敷の様相とその変遷」より抜粋した表③、そして松姫・鶴姫・竹姫・淑姫（十一代將軍家齊女）・溶姫の五人の將軍の娘の付属女中を比較した表④を参照することとする。ただし表④の内、松姫Ⅱは「御守殿雜志一・上」にある、松姫入輿後に祝儀を受けた女中の数より作成した。

表①によると松姫付女中は、大上臈のおさよの方をはじめ、介添一人・局一人・小上臈一人・若年寄四人・中臈六人・小性三人・表使三人・右筆三人・御次衆六人・御服衆（呉服之間）六人・盲女（ごぜ）二人・三ノ間衆三人・御末二人・御中居三人・御使番二人・御半下十一人・御祐筆間小間遣二人の計六十人であった。これらの女中衆は、又者と呼ばれる針妙（裁縫をする下女）と下女を計二百五十七人雇っており、総勢三百十七人になる。さらに松姫には入輿後、若年寄一人・呉服衆一人・三ノ間衆二人・使番一人・御半下四人が新たに付けられた可能性が考えられる。<sup>(42)</sup>文化六（一八〇九）年に、御守殿付の女中数が五十人に定められ、表④からも分かるように、淑姫（文化六年以前に入輿）以前と、溶姫ではその差は歴然であり、この人数は決して多くない。

さて、松姫御守殿付女中に出された幕府からの心得を見てみよう。

一、姫君様御為第一に奉存、松平若狭守儀又おろそかに不存、御奉公油断有まじき事。

一、表方の面々と申分など仕べからず。並表方へむづかしき儀申間敷事。

一、奥方より若狭守へ、人のわびごと惣而せうの儀申まじき事。

一、寺社の輩並諸職人・町人以下、奥方へ進物ささぐべからず。又は子ども・女房御禮いたさすべからず。若御禮不申上して不叶ものは、さよ・むめ・つばね相談のうへ差圖致すべき事。

一、女房衆上下共に、一年に二度の外宿へ出すべからず。其上さきもたしかならざる所江つかはすべからず。わかき衆の事は、さよ・むめ・つばね念を入申付らるべし。若不叶儀有之時は、さよ・むめ・つばねより相談之上さしづいたし、宿へ出すべき事。

#### (後略)

右の心得からは、松姫付女中が吉徳や表向き役人と直接対面することが想定されていることが分かる。また、寺社や町人の出入が行われ、女中一切の仕切りを大上臈おさよの方・介添梅津・局が行うことが述べられている。竹姫の場合には、おさよの方・梅津・局のところ<sup>(44)</sup>に、「とみ・岡田・藤え」となる。表<sup>(45)</sup>②によると、とみは大上臈、岡田は大年寄、藤えは御年寄である。大奥御年寄と同様に、御守殿奥向きの差配を行ったのは、上臈年寄から御年寄までの中の、三人が勤めたといえるだろう。それは、役に付く名前からも考えられる。奥女中の名は、身分の上下を示すものではなかった。大奥上臈年寄は公家の娘が勤めたため、飛鳥井・万理小路などの名を名乗り、「お」の字がつかない高野や戸波といった名は、御年寄・御客応答・御錠口・表使であった。御中臈・右筆・御次・呉服之間・御広座敷・御三之間・御末は「お」のつけられる名を、そして、中居・火之番・使番・半下は源氏名を名乗ったのであったのである。これは、御守殿付女中にもほぼ当てはまるが、表①から③によると、大上臈（右衛門左・おさよの方・てり）には当てはまらない。公家の娘になる上

臈御年寄とは違い、実質的な役割を担っていたためと言える。

これら女中には、役に応じた俸禄が支給された。その中でも扶持は、自分を除いた数の又者を雇う際の給料であったといわれている。<sup>(46)</sup>ここで表①の松姫付女中の又者を検討してみよう。

大上臈おさよの方は、八人扶持である。従来ならば、おさよの方本人を除いた、七人の又者を雇うことができる扶持である。実際は、おさよの方は針妙七人、下女五人の計十二人を雇っている。針妙を除くと考えても、御半下は一人扶持でそれぞれが一人の下女を雇っているのである。このことから、女中の扶持は必ずしも又者の数を規定するものではなかったといえる。

また、松姫付女中の俸禄は切米と扶持方しか記されていないが、表②・③の鶴姫・竹姫の例から、切米・扶持以外にも、薪・油・五葉銀・湯の木が支給されていたと考えられる。竹姫の場合は、「此度被召抱候女中を始、向後被召出候分ハ松姫君様女中御充行之通たるへく候事」とあり、松姫に倣っていた女中の俸禄が定められていた。これらの俸禄は、幕府側が支給したとする説と、<sup>(47)</sup>「將軍家から入興があれば、それにつきそって、女中衆や下男などもついてくる。(中略)その女中衆の切米は三八二石である。(中略)これらの扶持米も支出しなかったのである」と、すべて大名側が負担したとの説がある。<sup>(48)</sup>女中の俸禄は、大名家側の史料において、姫君付女中の手当ての詳細が見える事や、先の史料において「松姫君様女中充行之通たるへく」と書かれていることから、大名家側が負担したと見ることが妥当であろう。また、幕府側が負担したとされる場合においても、規定の俸禄以外に大名家側からも、御守殿入用があったことが指摘されている。<sup>(49)</sup>姫君付女中が、規定の手当て以外にも被下物があつたのは、「御守殿雜志三」<sup>(50)</sup>からも見受けられる。

そこには、三月の草餅の贈答、端午、重陽、月見、玄猪、正月御用の際の御餅に関する被下物が記されている。この史料は後にも使用するが、米や豆などの穀物に限った入用のみが記載されているため、女中衆への被下物はそれだけではなかったと考えられる。節句や儀礼に関わるこれらの費用は、大名家側が負担したのであった。

このように、御守殿には、その時々によって多少の変化はありながら、多くの女中が詰めており、大上臈・介添・局・小上臈の御年寄衆が、女中衆を統括していた。その中でも介添が松姫御守殿の采配をふるっていたと考えられる。そして、彼女らは直接男役人との交渉や、寺社・職人・町人等とも接していたことがわかる。女中は、御守殿の奥向きの役であるが、將軍の娘付として、御守殿の運営を表向き男役人とともに担っていたのである。ただし、その俸禄は男役人より低く、大奥や大名家の奥向きとは違い、側室となって異例の出世を遂げることもなかった。

## 第二章 御守殿の機能

### 第一節 御守殿と儀礼の関わり

#### (一) 幕府との関係

前章では、御守殿の空間構造の特殊性と、その機能を支える男役人・女中について明らかにした。「はじめに」において触れたように、女性の関わる儀礼についてはいくつかあるが、いずれも御台所や奥女中、大名夫人に限られ、將軍の娘が関与した儀礼については明らかにされてこなかった。しかし、御守殿が藩邸における第二の核であるならば、その主である將軍の娘が御守殿において行っていた儀礼にも、御守殿の特徴が見出せると考えられる。そこで第二章では、御守殿内部で行われている儀礼、大名家における將軍の娘を検討する。はじめに、近世における儀礼の意義を示し、松姫の幕府儀礼への関わりと婚家との関係をみていく。

幕藩体制国家に儀礼が取り入れられたのは、江戸時代初期の武士相互関係において、武力による解決を、儀礼秩序によ

って抑止する必要があったためであるという。<sup>(51)</sup>

幕藩体制における儀礼は、その確立期は明確ではない。しかし、関ヶ原の戦いから豊臣氏滅亡にともなう江戸幕府成立過程において、豊臣政権期や室町幕府の武家儀礼をもとに、徳川家の吉例を由緒として徐々に幕藩体制に取り入れていった。元和・寛永期から、武家官位をもとにした身分序列による、將軍拝謁儀礼が行われている。<sup>(52)</sup> 將軍の代替わりや、大名の世代交代などの様々な要因で、儀礼の詳細が変化していくことはあるだろう。だが、儀礼そのものは変化しながらも、江戸幕府初期から行われていたのである。やはりそこには、幕府が意図する大名統制策の一環としての機能があったのである。

大名が將軍に拝謁する幕府の年中儀礼は、正月三箇日（年頭御礼）・五節句（七種・上巳・端午・七夕・重陽）・六月十六日の嘉祥・玄猪・毎月朔日・十五日・二十八日の月次出仕である。そのうち、年頭御礼・八朔・嘉祥・玄猪が江戸幕府の四大儀礼と位置付けられるといわれている。幕府は儀礼によつて大名・幕臣統制を行い、秩序だった身分制の徹底と幕藩体制の安定を行っていたのである。<sup>(53)</sup>

五代將軍綱吉の養女となった松姫の、『徳川実紀』に記されている入興前に関係した贈答儀礼は、同じく綱吉養女八重姫（水戸徳川吉孚室）の娘、美代姫誕生祝儀のみであった。<sup>(54)</sup> だが前述の通り、幕府の行う儀礼には五節句をはじめ、嘉祥・八朔・玄猪がある。それらに関しては、「當賀例のごとし」として、詳細は記されていない。節句は幕府の儀礼としてのみではなく、近世以前より広く見られた行事である。詳細は記されないが、將軍家奥向きにおいても、行われていたと考えられる。また、これも松姫が養女になる以前であるが、元禄九（一六九六）年七月十日の条に、「けふ仰出されしは。御台所。桂昌院殿并に小谷の方。鶴姫君に物奉らば。宿老。昵近の輩へ伺ひ。指揮にまかすべし。其他のものにつきて献ずる事あるべからず。この御方々より賜物あらば。宿老。昵近のもとへまかりて拝謝すべし。<sup>(55)</sup>（後略）」とある。このことは、將軍家奥向きにおいて多くの贈答が行われていたことをしめしている。だが、將軍に対するものと違い、そ

れらすべて公のものとして記載されないという事実も考慮する必要がある。

次に入輿後であるが、松姫は宝永五（一七〇八）年十一月十八日に、前田吉徳へ入輿した。入輿に関する贈答は、入輿後の初登城まで行われた。松姫の初登城は十一月三十日に行われた。この入輿後初登城は「御膝直の登城」と前田家ではいわれており、將軍の娘が必ず行っている、入輿の儀礼の一つである。松姫には、登城のその日に、將軍綱吉から老中井上正岑が上使となり、入輿祝いが遣わされた。その一連の贈答においては、「御台様ハ御父子様江、御内所ハ御祝儀被進候、表向江者不相知也」とあり、將軍家の奥向きは、娘の入輿の贈答儀礼であっても、内証向きとして行われていた。また、従来將軍の娘が朝廷との贈答儀礼に加わることはないのだが、自身の慶事であったため、異例に朝廷からの祝儀も遣わされた。

入輿の祝儀以降、松姫御守殿へ訪れる幕府関係者を知るための、重要な定め「御守殿表御門御定書」が出された。<sup>(56)</sup> 御守殿の表門にあたる大門開閉の時間が定められ、続いて、使者が訪れた場合の対応が述べられている。対応すべき使者は、御三家・家門・連枝・側用人・老中・若年寄・側衆・西ノ丸老中・西ノ丸側用人・西ノ丸若年寄・西ノ丸側衆・幕府医師・留守居頭・式台番頭・本丸留守居番・二ノ丸留守居・御台所用人・西ノ丸留守居頭・御簾中用人・御部屋用人・西ノ丸式台番頭・八重姫用人・五ノ丸用人であった。<sup>(57)</sup> この定めは、前田家側が出している。それは、門番に関する役人が加賀藩士であったためであろう。入輿祝儀の使者以降、幕府からは以上のような様々な役人が訪れることが予想された。むろん、幕府へ問い合わせは行っていたと考えられ、幕府からの使者に対して、柔軟に対処すべく定められたのである。

松姫入輿後の將軍家・幕府との関係は、將軍綱吉の死去、それによる家宣の將軍宣下という大きな出来事により、弔慶の儀礼への参加というかたちで表れた。大葬への代参や、將軍拝賀儀礼への登城によって、入輿後の將軍息女も將軍家の一員として扱われていた。

平時における將軍家との交流は、松姫が宝永六年から享保五年に死去するまで、上使を遣わされた年中儀礼で、『徳川

実紀』に記載があるのは、宝永六年の端午と有卦・無卦・八代蜜柑であり、上巳に関しては、御三家からの祝儀のみである。<sup>(58)</sup>そこで、「御守殿雜志三」に記されているものを検討してみる。「御守殿雜志三」は、一冊に享保四年一年間の松姫御守殿における祝物が、「節々御祝物帳」としてまとめられている。將軍家に対して行われているものは次の通りである。<sup>(59)</sup>

- 一、 亥正月十九日御登城赤飯出来之覚（公方様・浄光院様・一位様・瑞春院様・養仙院様・竹姫君様）
  - 二、 亥二月廿七日一位様江御進物
  - 三、 亥三月御草餅（公方様・浄光院様御牌前・瑞春院様）
  - 四、 亥四月七日養仙院様江御進物強飯
  - 五、 亥五月節句御粽（公方様・瑞春院・浄光院様・竹姫様）
  - 六、 亥六月四日土用入小豆餅（公方様・一位様・瑞春院様）
  - 七、 亥六月十二日土用之中小豆御餅（公方様・一位様・瑞春院様）
  - 八、 亥六月廿一日土用明小豆御餅（公方様・一位様・瑞春院様）
  - 九、 亥七月蓮御飯（公方様・瑞春院様・竹姫君様・浄光院様御牌前）
  - 十、 亥十月十二日玄猪御祝餅（公方様・瑞春院様）
  - 十一、 亥十一月廿七日寒入小豆御餅（公方様・一位様・瑞春院様・竹姫君様）
  - 十二、 亥十二月十九日養仙院様江御進物赤飯黒塗大行器一荷
  - 十三、 享保四年十二月末正月御用御餅（公方様・瑞春院様・常憲院様・浄光院様）
- この十三の祝儀の贈り先は、將軍（公方様、八代將軍吉宗）・一位様（六代將軍家宣の御台所天英院）・瑞春院（綱吉側室、五ノ丸）・養仙院（夫水戸徳川吉孚死後に落飾した八重姫）・竹姫であった。そして、すでに亡くなっている常憲院（綱吉）・浄光院（綱吉御台所）の名が見えるが、「浄光院様御牌前」とあることから、霊前へそなえられたと考えら



れる。ここでの年間十三の祝儀は、登城・上巳（蓬餅を用いる）・端午・土用・蓮（七月の祝儀）・玄猪・寒入・正月の入用であった。幕府の主要儀礼の内、七種・嘉祥・七夕・八朔・重陽が見られない。この祝儀の特徴は、被進物が赤飯・餅・小豆などの穀類に限られていることである。そのため、松姫と將軍家の間が記載事項のみであったとは考えられない。

時代はだいぶ下ることになるが、「大奥向御規式之次第 安政年間調」では、將軍息女を含めた將軍家と御三家・御三卿そして由緒の大名家（十一代家斉との由緒）の間での贈答が定められている。<sup>(60)</sup>それらは、正月元旦・二日・三日・四日・七日（七種）・十一日・十五日・三月三日（上巳）・四月十五日（十一代將軍家斉の誕生日）・五月二日（端午の前）・五日（端午）・六月一日（氷室）・十五日（山王社祭礼）・十六日（嘉定）・夏切御茶（日限不定）・土用（日限不定）・七月一日・七日（七夕）・十五日（中元）・八月一日（八朔）・十五日（月見）・九月七日（重陽の前）・九日（重陽）・十五日・玄猪（十月初亥の日）・十二月十三日（煤払）・二十一日（歳暮）・寒入（日限不定）そして、鷹之鷹（日限不定）・八代蜜柑（日限不定）である。將軍が子女の多い家斉であり、現職將軍の由緒の者が多かったため、贈答が多く定められたとも考えられる。だが、史料不足であることと、御守殿の空間構造が多くの訪問者を迎える造りになっていたこと、実際の門の規定から幕府や御三家・大名家の使者を迎えていたことを考慮すると、松姫の時代も同等な贈答が行われていたと考えられる。

また、松姫は十歳で入興したため、女子の通過儀礼が入興後行われている。將軍家の成人までの儀礼には、袴着（袴始め、五歳頃）・袖留（振袖から留袖、十五歳頃）・前髪執り（十七歳頃）<sup>(61)</sup>があった。松姫は齒黒祝（鐵漿初の祝儀、九歳頃）・袖留の儀・鬢削の祝を行い、將軍家との贈答を行っている。

將軍家と入興後の將軍息女の交流は、しばしば御守殿へ使者を迎えたり、江戸城へ使者を遣わすかたちで行われた。竹姫の場合であるが、將軍や世子の老中が使者となると、「此方共出向候而、御鎖口内御客座江御案内申、御祝儀物右之御

座敷二居り、御口上者大上臈承被申候」とあり、御守殿付役人が御守殿玄関へ迎えに出て、御守殿奥向きへ使者を通したのである。使者に対応したのは、大上臈であった。<sup>(62)</sup> 竹姫の入輿全般は、松姫に倣って行われている。そのため、御守殿の構造や、御守殿内の所作も松姫を例にしたと考えられる。平時に遣わされた使者は、將軍の娘に直接対面するのではなく、女中が対応していたのであった。

將軍の娘は、御守殿に使者を迎えるだけではなく、江戸城大奥へ登城することもあった。松姫の登城は、將軍の代替り後も、ほぼ毎年行われており、年始の登城が一番多い。登城の際には、通行に関する規制がだされ、大名家の人員は多く必要とされた。前田家は、家老・吉徳家老・松姫付用人などの他、新番六人・小將四人、そして辻固めに広式番歩を六、七十人、足輕百人余り、小者三、四百人を役につけたのであった。<sup>(63)</sup> 行列には大名家からの者以外にも、姫君付女中、幕府側姫君付役人、そして幕府から遣わされた留守居なども加わった。通行制によって、町方の負担は軽くなったように感じられるが、その行列は簡素というには、ほど遠いものであった。

この様に、松姫は將軍の養女となり、入輿後も將軍家の一員として贈答儀礼に加わっていた。特に將軍の死や、それに伴う葬儀、將軍職継承祝儀には將軍の家族としての参加ではあるが、その存在を世にしめたのである。

## (二) 大名家との関係

幕府との関係で、將軍家の一員としての性格を認識されていた松姫は、婚家の前田家とも新たに交際を始めることとなった。松姫を継嗣吉徳の正室として迎える時点の藩主は、五代綱紀である。綱紀は母方が將軍家・御三家であり（血筋は家光養女大姫が母）、父方であっても、祖母が秀忠息女珠姫のため、將軍家や家門が縁戚であった。そのため、他家で行ったような、交際範囲を幕府に伺うことはなかった。<sup>(64)</sup>



前田家が御守殿へ家老を遣わせる儀礼は、歳暮・八朔と、五節句の内、七種（一月七日）・端午（五月五日）・七夕（七月七日）・重陽（九月九日）であつた。<sup>67</sup>幕府の四大儀礼は、年頭御礼・八朔・嘉祥・玄猪である。年頭・八朔の儀礼では、前田家から御守殿へ祝儀が遣わされ、玄猪においては、御守殿から先に祝儀が遣わされた。この形式は、幕府が諸大名・幕臣との間で行うかたちと同様である。ただし、嘉祥における贈答は行われていない。

四大儀礼以外で行われた贈答は、前田家からは、七種・端午・七夕・重陽・歳暮であり、御守殿からは、端午・七夕・重陽・歳暮の他に、口切茶・寒気と暑気見舞・帰国の餞別・発駕見送であつた。これらは、特に將軍の娘と大名家の間の特別な贈答であつたとはいえない。

贈答儀礼の他に、松姫の表入り・御守殿における饗応・綱紀登城の際の御守殿入りなどの相互の行き来は、宝永六（一七〇九）年四月二十九日に御守殿へ綱紀・吉徳・利章・寵姫を招いて饗応をしたことに始まつた。松姫を初めて表御殿へ迎え入れた前田家の対応は、「其仕組御作事二而改出来候、夥敷御催之由候」と記されているほど、大掛かりなものであつた。<sup>68</sup>

前田家が松姫を継嗣夫人以上のものとして、認識していたと考えられる出来事は、安芸御前（節姫）・因幡御前（敬姫）と称された綱紀の二人の娘の初御守殿入りから窺える。<sup>69</sup>御守殿に入つたのは安芸御前・因幡御前、それに寵姫も加わつた。前田家は、この両御前の御守殿入りを、御目見としている。そして、着座の順も考慮すべき事項であり、松姫家老川副新右衛門が、綱紀に書付を渡し、寵姫・因幡御前・安芸御前の順とした。その基準は、江戸城における夫の家の座次に倣っていたのである。寵姫に関しても同様であつた。寵姫は浅野吉長の娘であり、その生母は安芸御前である。だが、綱紀養女であつたため、その家格により他の二人の上位にいたのであつた。

松姫と前田家の間の贈答儀礼は、年始・八朔・玄猪は幕府が大名や幕臣に行うものと同様の形式を、それ以外は大名家の一員として行われていたといえる。ただし、相互の出入りに関しては、特に御守殿内に前田家の者を招くときは、御目

見の形をとり、將軍の娘であることを象徴するものであった。

## 第二節 婚家における御守殿

### (一) 御守殿の入用金

ここまでは、大名家における御守殿という御殿の存在と、御守殿内部（表御殿を含む）で行われた儀礼の諸相により、御守殿の特殊性をみてきた。入輿後も將軍家の立場をしめした將軍の息女は、空間構造や社会構造において大名家に影響を与えていたが、経済的にも影響を与えていた。

松姫は入輿後の宝永七（一七一〇）年に、「今年より年々金二千兩。米五百表つかわさるべし」と、幕府より命じられた。<sup>(70)</sup>だが、松姫に関するそれ以前の入用金、前田家側の負担は知れないため、他の將軍の娘の例を見ていく。

享保十四（一七二九）年島津家に入輿した竹姫の場合、「御守殿御方年中諸色爲御入用金、六千兩年々本宅より被進候様被仰渡候」とあり、六千兩を島津家が負担したことが分かる。その内容は、召物・被進物并被下物・菓子・水菓子・不時二被進物・道具等修復并木具類・膳味噌并炭薪油紙墨筆蠟燭・規式膳部・普段朝夕三度目・膳部肴青物・膳酒醬油溜酢・次肴并青物干物類・召仕女中充行の他、四季の御用金銀・同四季施物定式被下物で、個々の高は記されていないが、その合計高が六千兩となったのである。<sup>(71)</sup>

幕府からの化粧料は、入輿以前から五百兩が毎年支払われていた。<sup>(72)</sup>停止や増加の旨がないため、続けて支給されたと考えられる。竹姫は、女中や男役人の扶持を除いた六千五百兩で、御守殿内の入用を賄っていたといえる。

竹姫の後、享保二十（一七三五）年に伊達宗村に入輿した利根姫は、女中の手当ての他に六千兩が仙台藩の負担となつ

たが、詳細や幕府からの化粧料は明らかではない。<sup>(73)</sup>

次に時代を下り、十一代將軍家齊の二例を挙げる。まずは松姫の後、文政六（一八二七）年に前田家に入興した溶姫の入用金に関しては、「溶姫君様御住居定式一ヶ年分御入用御省略取調帳」という史料が残されている。<sup>(74)</sup>その内容は、御手元金・御召服御用・御召服地渡染縫并慰用・足袋・化粧道具墨紙御守切類側入用・年中上被進被遣被下神仏への御供并登城入用・御付女中被下金并内証抱女中給金奥廻り入用・年中前田家男女江被下入用・御膳初炭薪等台所入用・日用品奥廻り入用・作事方入用・御付女中宛行諸渡り物・人足賃金・前田家から女中并用人などへ贈物・前田家の扶持方入用である。これらの合計高は、金一万八千四百二十二両であった。竹姫の六千両と比べると、三倍である。

溶姫の姉にあたる峯姫は、文化十一（一八一四）年に水戸徳川斉脩に入興した。この峯姫の入用金は、伊東多三郎氏の「御守殿の生活費」で紹介されている。<sup>(75)</sup>峯姫の入用金は、文政八（一八二五）年二千九百五十八両、文政十年二千九百一十両、天保元（一八三〇）年二千六百三十八両であった。これにより、年間約三千両の入用であったといえる。ただしこれらには、幕府からの峯姫付女中・男役人、水戸家側からの附属人の手当ては含まれていない。そして幕府からは、化粧料として年間金三千両、米五百表、女中手当てが別に遣わされていた。これらのことを考えると、峯姫の入用は、一見幕府からの化粧料で賄われていたようにも思える。だが、実際の年間入用は幕府からの化粧料とは別であり、合わせて約六千両がかかっていたのである。さらに水戸徳川家には文政年中、毎年六千五百両から七千両が幕府より下賜されていた。これらのすべてが、峯姫の化粧料ではないが、天保二年の御守殿経費は定式以外に約九千両にのぼっていた。

御守殿の入用に関しては、幕府からの化粧料が下される場合と下されない場合があったが、溶姫を除いた御守殿の、基本的な入用金は約六千両であったといえるだろう。ただし、これらはあくまでも最低限のものであり、女中の基本俸禄や、前田家側からの被下物、扶持などを加えた溶姫の入用金は、二万両弱であった。峯姫も六千両が基本入用としながらも、女中手当てやその他の支出があったと思われる、結局一万五千両近くの入用金を要していたのである。

これらのことから推測すると、松姫の諸入用が幕府からの合力金二千両・米五百表で賄われたことは考えられない。松姫の入興に関しては、大姫が前例とされ、その松姫を倣ったのが竹姫であり、竹姫を前例としたのが利根姫、そして時代が変わっても同じ前田家へ入興した溶姫は、やはり松姫を前例としたであろう。そのことからさかのぼって考えると、松姫の入用金は前田家に四千両ほどの負担を強い、その他女中の諸手当なども負担させていたと考えられる。

## (二) 大名家における將軍の娘

幕藩体制が安定し、將軍の娘の婚家と成り得る大藩の改易の危惧が薄れると、大名家は將軍の娘の入興を敬遠するようになっていった。<sup>(76)</sup>大名家は様々な理由を挙げて、入興に難色を示したが、実際問題は財政難にあった。ただし、將軍の娘は、費用がかかる存在としてのみ、大名家に在ったわけではない。將軍の娘であれ、入興により大名夫人としての立場も加わっていたのである。特に、將軍の娘が子どもを生むと、藩にとって大きな意味を持つことになったが、松姫に子はなかった。

子を生むことはなかったが、松姫は將軍家の威光を象徴していただけではなく、大名夫人として、家の利益になるように行動した例もみられる。例えば、吉徳と共に幕府に願い出をしたことがあった。願い出たのは綱紀の帰国延期であり、「當御帰国御道中、最早雪中にも向候に付、從松姫君様来春迄御発駕御延引之儀御願に而、今日戸田山城守殿江間番被召呼被仰渡有之、(中略)右に付来春雪消次第御発駕与被仰出(後略)」とあるように、松姫の口添えによって願いが叶えられている。<sup>(77)</sup>

相続に絡んで、大名家の一員として動いたのは、八重姫と竹姫である。

八重姫(五代綱吉養女)は、水戸徳川吉孚に入興し、翌年美代姫を出産した。その翌年、吉孚は二十五歳の若さで亡く

なってしまった。この時の藩主は三代綱條であり、吉孚は未だ家督を相続していなかった。これにより、八重姫は世子夫人のまま二十二歳で落飾し、養仙院と称することになる。<sup>(78)</sup>綱條の吉孚以外の男児はみな夭折していたため、美代姫が水戸徳川家の総領娘として、婿養子をとることが、綱條によって定められた。<sup>(79)</sup>

八重姫が美代姫を伴って登城したのは、まだ吉孚が生存していた、宝永六（一七〇九）年五月の六代將軍家宣將軍宣下の際にであった。<sup>(80)</sup>その後八重姫は、家宣没後の七代家継の將軍宣下以前、正徳三年一月に、そして享保元（一七一六）年八月の八代吉宗の將軍宣下後に、美代姫同伴の大奥登城を行っている。<sup>(81)</sup>八重姫は將軍代替りごとに、美代姫を將軍に御目見させていたのである。

諸大名やその世子の將軍への御目見は、拜謁儀礼として主従関係や、家格秩序の問題として重要な意味をもっていた。だが、年中儀礼の御目見以前に行われる、はじめての御目見は人生儀礼の中で特に意味のあるものであった。それは、大名が対外的な活動を実施する準備行為であり、御目見が済まないうちは、公的に一人前とは見なされず、対外交流も制限されたというのである。<sup>(82)</sup>もちろん、大名夫人や娘の將軍御目見は、公的には行われない。將軍の娘に伴われた、大名の娘の御目見も公的効力はもたなかっただろう。しかし、將軍と対面できた大名家の女性はほとんどない。八重姫が將軍代替りごとに、美代姫を伴って登城を行ったことには、美代姫の立場を暗に世間に披露したといえないだろうか。

美代姫は、享保八年に水戸徳川家の支藩、高松松平頼豊の子宗堯と婚姻し、宗翰を出産した。<sup>(83)</sup>だが、二年後宗堯は二十歳で死亡した。八重姫は享保十九年、元服前の鶴千代（宗翰）と共に大奥へ登り吉宗に御目見させた。この御目見は、『徳川諸家系譜』に、「大奥おいて奉謁有徳公」とあり、通常の初御目見と同様に記されている。<sup>(84)</sup>宗翰はその後、享保二十年にまた大奥へ登城しているが、それには「うちうちの御對面あり」とある。<sup>(85)</sup>よって、八重姫に連れられた初御目見は、大きな意味をもっていたものと考えられる。

八重姫はその後、宗翰の養育と婚姻に力を注ぐこととなる。水戸徳川家藩主の婚姻は、二代光圀・三代綱條が公家から



正室を迎えてきていた。八重姫はそのことを考慮し、宗翰の婚姻相手に、公家の娘を選んだ。婚姻相手となったのは、八重姫の叔父の娘、一条兼香息女千代君であった。八重姫は、実父鷹司輔信を通して縁談を進め、幕府への交渉も行ったのである。<sup>(86)</sup> 八重姫は水戸徳川家の継嗣たちを守り立てるために、將軍の娘という立場を利用しつつ、大名の夫人として行動していた。

竹姫も同様である。すでに継嗣益之助（宗信）が出生していた島津継豊に降嫁した竹姫、実子が生まれた後も、益之助を継嗣とすることが約束されていた。竹姫は、入興直後に益之助を養子とし、<sup>(87)</sup> 益之助と江戸城へ登城したのは、実子菊姫が生まれた後の享保二十年のことであった。菊姫と益之助の両名を、吉宗に対面させている。<sup>(88)</sup> 益之助の場合は、はじめての御目見は元文二（一七三七）年とされており、大奥での御目見は公的なものとはされなかった。<sup>(89)</sup> しかし、將軍姫君に伴われての益之助登城は、意味なく行われたとはいえない。その際には、竹姫・継豊父子のみならず、前藩主吉貴とその妻を含めた贈答が行われており、島津家にとっては益之助の立場を確認するものとなった。

その後、継豊は宗信（益之助）に家督を譲り、寛延二年から国許に隠居した。<sup>(90)</sup> だが、島津家においても六代宗信・七代重年（妾腹継豊子）が若くして死去し、竹姫は八代重豪の養育にあたったのである。<sup>(91)</sup> 婚姻においても、竹姫入興後は尾張徳川家や一橋徳川家との縁組があり、これまでの島津家の婚姻関係を変化させている。これは、重豪息女が十一代將軍家斉の御台所となることや、幕末の幕府と島津家との関係に大きな影響を及ぼしていくのである。

このように、將軍の娘は將軍の娘としての立場、藩主夫人の立場の両方を意識していたことが明らかになった。特に江戸城へ自身が登城し、將軍と直接対面できることを必要に感じて最大限に利用し、大名家へ有利に働いた。そして、相続に関しては、大名家の以降の婚姻関係を変化させる役割も果たしていたのである。

## おわりに

本論では、御守殿の空間構造と、内部における儀礼の具体像、およびそれに関連する人々のあり方を明らかにしてきた。空間構造的には、大名家の「奥」でありながら、御殿自体が表御殿とは別に、「表」と「奥」を備える二重構造をし、それぞれが機能する御殿として完結したものであった。そして、「表」には幕府役人と大名家士が、常に同空間に在る状態であった。江戸藩邸全体の社会構造からは、御殿空間内に表御殿以外の核を出現させ、さらに幕府をはじめとする武家社会の他にも、町人を含む外世界と独自に通じる空間となっていたのである。

御守殿の主である將軍の娘は、大名夫人でありながら、儀礼においては將軍家の一員として、大名家に幕府の權威を象徴している存在であることを示していた。御守殿は、経済的に大名家に多大な負担を強いてきたが、將軍の娘はその立場を利用し、大名家の大事（特に相続や婚姻）には幕府に働きかけ、大名家に有益に動いていたことも忘れてはならない。御守殿それ自体は、主である將軍の娘が死去すると、御守殿廢奉行が定められ、大名江戸藩邸から撤去されることとなった。それに伴い、幕府からの御守殿付男役人・女中（將軍に御目見以上）は江戸城へ戻り、幕府役人として再編されたのである。<sup>(92)</sup> また、前田家においては、御守殿付の重役を勤めた者には、通常では見られない優遇処置がとられ、御守殿がなくなつた後にも、大名家の秩序に影響を与えていたのである。<sup>(93)</sup>

今回は、御守殿という大名江戸藩邸に通常存在しない特殊事例ではあるが、先行研究では見受けられない、奥向きの空間構造とそこに属する人々を関連させた視点で論じてきた。御守殿という空間に注目することで、奥向きが単なる女性の空間、あるいは主人の私的空間であるという概念では捉えられないことが明らかになった。また、御守殿をとりまく社会も奥向きは女性社会、表向きが男社会とは言い切れない。將軍の娘は藩主夫人である以前に將軍権力の象徴であり、それが大名家と関わる儀礼においても表れていたのである。

註

- (1) 相川由美「大名屋敷の生活と規制」(『歴史評論 十二月号 五三六』) 丹波書林 一九九四年
- (2) 長野ひろ子『日本近世ジェンダー論』吉川弘文館 二〇〇三年
- (3) 長野 註(2) 書、柳谷慶子「武家社会と女性」(『日本の時代史⑩享保改革と社会変容』) 吉川弘文館 二〇〇三年
- (4) 松崎瑠美「近世武家社会のジェンダー・システムと女性の役割―近世中期の仙台藩伊達家を事例として―」(『歴史 第一〇三輯』) 二〇〇四年、同「天下統一・幕藩体制確立期における武家女性の役割―仙台藩伊達家を事例として―」(『国史談話会雑誌 第四十五号』) 二〇〇四年
- (5) 大口勇次郎編『女の社会史』山川出版 二〇〇一年、長野ひろ子『日本近世ジェンダー論』吉川弘文館 二〇〇三年、畑尚子『江戸奥女中物語』講談社 二〇〇一年、松尾美恵子「江戸幕府女中分限帳について」(『日本女性史論集②政治と女性』) 吉川弘文館 一九九二年、柳谷慶子「武家社会と女性」(『日本の時代史⑩享保改革と社会変容』) 吉川弘文館 二〇〇三年等。
- (6) 宮崎勝美「紀尾井町遺跡における大名屋敷の様相とその変遷」(『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』) 千代田区紀尾井町遺跡調査会 一九八八年
- (7) 渋谷葉子「幕藩体制の形成過程と大名藩邸―尾張藩邸を中心に―」(『徳川林政史研究所紀要』第三十四号) 徳川黎明会 二〇〇〇年、同「尾張藩江戸上屋敷の殿舎と作事―一七世紀前半の様相―」(『徳川林政史研究所紀要』第三十八号) 徳川黎明会 二〇〇四年
- (8) 深井雅海『図解・江戸城をよむ』原書房 一九九七年 二一八頁
- (9) 宝永年間編纂の「三壺記」には、「此御作事に、幾千萬の御入用夥敷、其中に御守殿の破風に孔雀鳳凰、大臺所の破風に獅子に牡丹の彫物を(後略)」とある。大姫の入輿に関して『加賀藩史料』には、「御守殿」の文字はなく、『石川縣史』においても、他には「御守殿」の文字は見られない。また、「大臺所」がどこを指すかは明確ではない。大姫の御殿作事の事項に出ているため、大姫御殿内の台所であったと考えられる。(『石川縣史 第三卷』石川県 三五三頁)
- (10) 渋谷 註(7) 書による。
- (11) 畑尚子「御守殿」(『江戸幕府事典』東京堂出版) 一一六頁
- (12) 同右。村井益男「御守殿」(『国史大辞典』吉川弘文館)
- (13) 松姫の入輿相手吉徳は、宝永五(一七〇八)年の時点で未だ継嗣であり、正四位下、享保十四(一七二九)年に島津継豊に入輿した五代將軍徳川綱吉養女竹姫の婚姻相手、継豊は従四位下少将、八代將軍吉宗養女利根姫の婚姻

相手、仙台藩主継嗣伊達宗村は入奥当時の享保二十（一七三五）年、従四位下侍従であり、竹姫の最初の縁組相手、会津松平正邦にいたっては、叙任さえもされていなかったが、いずれも姫君の住まいを「御守殿」と称している。『寛政重修諸家譜』巻第百八、巻第七百六十二 続群書類従完成会

(14) 畑・村井 註(11) 書

(15) 宮崎 註(5) 書七二四頁

(16) ただし、今後本論での「御守殿」は、將軍の娘の御殿を指すこととする。

(17) 鶴姫（綱吉女）の御守殿は、絵図や地形によると、三千数百坪から五千坪、利根姫（吉宗養女）は仙台藩江戸藩邸一万坪の六割に当たる六千坪、溶姫は五千数百坪、松姫の場合は、御守殿付属の土蔵地を含めると九千坪となる。そして竹姫の場合は、縁組が決まった時点で、会津松平家へ約一万九千坪、島津家へは約六千九百坪の添地が幕府から下賜された。会津松平家への添地は他の例から考えて、この土地全てが御守殿用地であったとは考え難い。結局、竹姫が会津松平家へ入奥することなかったため、その詳細は不明である。（『会津藩家世実紀 卷九十三』五一九頁 吉川弘文館、土田美緒子「竹姫入奥一件」（『尚古集成館紀要第一号』尚古集成館 一九八七年 四二頁）

(18) 松姫御守殿の絵図①は「光現大夫人御守殿御間絵図」（出典『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告』より作成

（光現大夫人は松姫の諡）、図②・③は「御守殿廻惣絵図」より作成、溶姫御守殿の絵図④・⑤「江戸御上屋敷惣絵図①江戸御上屋敷絵図」より作成。

(19) 宮崎 註(5) 書六九二～六九三頁

(20) 地震の間は、「間」といはいうものの、部屋というよりは堅固な小屋であったようである。御守殿特有のものではなく、江戸城や諸大名の城郭に建設された。（加藤秀幸「城郭殿舎建築における地震屋・地震之間・地震御殿の史的考察」（『歴史地震』）第十三号 歴史地震研究会 一九七七年一九一頁）

(21) 宮崎 註(5) 書六九九頁

(22) 細川義「江戸時代における理学部7号館地点の変遷」（『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1東京大学本郷構内の遺跡理学部7号館地点』一九八九年四九七～四九八頁）

(23) 松尾美恵子「広敷向の役職」（『江戸幕府事典』東京堂出版 一三七頁）

(24) 「御殿空間」・「詰人空間」の呼称は、近年の研究において定着してきているため、倣うこととする。（吉田伸之「近世の城下町・江戸から金沢へ」『朝日百科 日本の歴史・別冊 歴史の読み方』朝日新聞社 一九九二年）

(25) 吉田伸之「近世の城下町・江戸から金沢へ」（『朝日百科 日本の歴史・別冊 歴史の読み方』朝日新聞社 一九九二年二二頁）

(26) 『常憲院殿御実紀 卷五十八』吉川弘文館 宝永五年

九月十九日条 七一〇頁

- (27) 「御家人分限帳 五」〔御家人分限帳〕近藤出版社  
一九八四年) 一一八―一二〇頁、「御守殿雜志一・上」、  
「護国公御年表」

- (28) 前註 (25)

- (29) 「御用所日記抄」宝永六年七月二日条

- (30) 「御用所日記抄」享保二年七月十六日条

- (31) 「御用所日記抄」享保三年八月二十五日条

- (32) 「護国公御年表」

- (33) 「御守殿雜志一・上」

- (34) 「御守殿廻惣御絵図」、図③参照

- (35) 『江戸幕府 役職武艦編年集成 第七卷』東洋書林

- (36) 賄頭溝口惣次郎・立合役諸色買上方萩原新五・同山田  
藤太夫・料理人飯塚式左衛門・同市川権七・算用組木村平  
八のみであり、六人一部屋であつた。(「御守殿廻惣御絵  
図」、図③参照)

- (37) 「御用所日記抄」正徳三年二月五日条

- (38) 「御用所日記抄」享保三年七月廿七日条、「正徳享保  
江戸日記」正徳四年七月廿九日条、十二月七日条、享保元  
年七月廿八日条、享保三年七月廿七日条、享保三年十二月  
廿五日条

- (39) 「正徳享保 江戸日記」正徳五年一月一日条、享保元  
年九月十五日条、享保三年閏十月廿五日条、「御用所日記  
抄」享保四年四月廿二日条

- (40) 「正徳享保 江戸日記」享保三年十一月三日条

- (41) 『加賀藩史料 第二篇』清文同出版 寛永十年十二  
月五日条 七二三頁

- (42) 入興後の史料には、年頭に祝儀を遣わされた女中数が  
「メ六拾七人」とあり、表④からも、その総数が合わず、  
合計五十七人である。そこで、年頭祝儀に記されていない  
った、中臈六人・表使三人・御祐筆間小間遣二人を足すと  
六十八人となり、六十七人に限りなく近い。そうなると、  
鶴姫付女中の数と近くなる。鶴姫は、松姫の養父綱吉の息  
女であり、綱吉の代に入興している。そのため、松姫の入  
興後に、若年寄一人・呉服衆一人・三ノ間衆二人・使番一  
人・御半下四人が新たに付けられた可能性が考えられる。  
〔松姫君様御附属之女中江被下御賄方之覚〕

- (43) 畑尚子『江戸奥女中物語』講談社 二〇〇一年 六十  
八―六十九頁

- (44) 『旧期雜録追録三ノ二』鹿児島県 卷六十九 二三九  
九 九五二―九五三頁

- (45) 松尾美恵子「江戸幕府女中分限帳について」(『日本女  
性史論集②政治と女性』吉川弘文館 一九九二年 七十  
―七十一頁

- (46) 畑 註 (41) 書七十四頁

- (47) 伊東多三郎「御守殿の生活」(『日本歴史 第二九三号』  
吉川弘文館 一九七二年 一〇四頁

- (48) 児玉幸多『日本歴史⑱大名』小学館 一九七五年 一

五九一六〇頁

(49) 伊東 註(49) 書

(50) 「御守殿雜志三」

(51) 小宮木代良『近世武家政治社会形成期における儀礼』  
『日本の時代史⑭江戸幕府と東アジア』吉川弘文館 二〇〇三年 一八六頁

(52) 川島慶子「寛永期の大名の身分序列について―正月二日の拝賀札の検討を通して」(『史艸』四十) 日本女子大学史学研究会 一九九九年、二木謙一『武家儀礼格式の研究』吉川弘文館 二〇〇三年

(53) 二木 註(52) 書

(54) 『常憲院殿御実紀 卷五十八』宝永五年九月七日条 七〇八―七〇九頁、『常憲院殿御実紀 卷五十七』宝永五年二月七日条 六八六―六八七頁、宝永五年六月二日条 六九七―六九八頁

(55) 小谷の方は、鶴姫・得松生母五ノ丸。この時点で、鶴姫は入興後である。(『常憲院殿御実紀 卷卅四』元禄九年七月十日条 二六六頁)

(56) 「御守殿雜志一・上」

(57) 御三家から医師までは、門限以降も表門から通し、それ以外は裏門から通すように定められている。ただし、上使の場合は表門からとされた。(『御守殿雜志一・上』)

(58) 『有章院殿御実紀 卷十一』正徳五年三月三日条 四百二十頁

(59) 数字・○は筆者がまとめたものである。○内は松姫の贈答相手。(『御守殿雜志三』)

(60) 「將軍徳川家禮典附録 卷之二十六」(『徳川禮典録(下)』原書房)

(61) 笠原綾「元服の祝儀」(『徳川幕府事典』東京堂出版) 八十八頁

(62) その他、女中が上使になる場合などの対応の伺いも出されているが、回答が記されていない。伺いの内容から、使者の主人の身分により、玄関や裏門などの通行が分けられた。(『御守殿雜志一・上』、『旧記雜録追録三ノ二』卷六十九 二四四五―二四四七 九八一―九八五頁)

(63) 「御守殿雜志二」

(64) 竹姫の婚姻相手である島津継豊は、祝儀献上と御機嫌伺いの許可を、祖母(信證院)・生母(おすま)・叔母(於菟・淡路守妻)の他に、一門の妻までを願った。はじめは一門の妻は許されなかったが、「願之通二可被致候」と、若年寄を出す幕臣の家系の息女であるため許されたと考えられる。信證院もおすまも側室であったが、藩主生母としての立場を重んじている島津家に、幕府も理解をしめしている。(『旧記雜録追録三ノ二』卷六十九 二四五二 九八六―九八七頁)

(65) 「前田氏世譜」(『加賀松雲公』) 二―十二頁

(66) 直姫は後に栄君と改名し、金沢から京の二条吉忠に嫁した。出生地からも、松姫入興から上京まで金沢に居住し

ていたと考えられる。養女になった誠姫も同様に、婚姻のための出立地は金沢であり、江戸在住はなかったと考えられる。

(67) 「御守殿方御用」

(68) 『加賀藩史料 第五篇』宝永六年四月廿九年条 八四九頁、「御守殿雑志二」、「御用所日記抄」宝永六年廿九日条

(69) 『加賀藩史料 第五篇』正徳元年三月廿五日条 九一〇頁

(70) 『文昭院殿御実紀 卷六』宝永七年四月十一日条 九十五頁

(71) 『旧記雑録追録 四ノ一』卷七十二 五十五～五十七頁

(72) 『文昭院殿御実紀 卷四』宝永六年十二月廿九日条 七十六頁

(73) 齋藤鋭雄「江戸中期幕藩関係の儀礼について―伊達宗村の婚姻」(『宮城県農業短期大学報告 第四十三号』)宮城県農業短期大学 一九九五年 二頁

(74) 「溶姫君様御住居定式一ヶ年分御入用御省略取調帳」

(75) 伊東多三郎「御守殿の生活費」(『日本歴史』九月号 第二九二号) 吉川弘文館 一九七二年

(76) 『会津藩家世実紀 卷之九十三』宝永五年七月廿五日条 五六九頁、『旧記雑録追録 三ノ二』卷六十六 二一九二 八二二頁、柳谷慶子「武家社会と女性」(『日本の時

代史①⑥享保改革と社会変容) 吉川弘文館 二〇〇三年 二六八頁

(77) 『加賀藩史料 第六篇』享保四年十一月四日条 一七七頁

(78) 『文昭院殿御実紀 卷四』宝永六年十一月十日条 六十四頁

(79) 久保貴子「武家社会に生きた公家女性」(『日本の近世①⑤女性の近世』中央公論社一九九三年 九十頁

(80) 『文昭院殿御実紀 卷二』宝永六年五月十一日条 三十三頁

(81) 『有章院殿御実紀 卷二』正徳三年正月十三日条 二九六頁、『有徳院殿御実紀 卷二』享保元年八月廿五日条 三十頁

(82) 大友一雄「近世武家社会の年中儀礼と人生儀礼」(『日本歴史 第六三〇号』) 吉川弘文館 二〇〇〇年 五十五～五十六頁

(83) 『徳川諸家系譜』「水戸家」続群書類従完成会 二五四～二五五頁

(84) 通常「奉謁□□公」とあり、□□には時の將軍の諡が入る。宗翰には他の奉謁が記されておらず、「大奥において」が、他と違うのみである。(『徳川諸家系譜』「水戸家」二五五頁)

(85) 『有徳院殿御実紀 卷四十一』享保二十年正月廿五日条 六七四頁

(86) 久保 註(77) 書九十、九十二頁

(87) 『旧記雜錄追録 四ノ一』 卷七十一 七六 五十九頁

(88) 『有徳院殿御実紀 卷四十一』 享保二十年二月十三日  
条 六七五頁

(89) 『寛政重修諸家譜』 卷第百八 (嶋津称松平) 第二 三  
五一頁

(90) 江後迪子『武家の江戸屋敷の生活Ⅱ―鹿兒島藩島津家中奥日記から―』(『研究紀要5』港区立港郷土資料館) 一九九八年 四頁

(91) 江後 註(90) 書

(92) 松姫付女中のうち上級女中の五人は、「御局并梅津及若年寄女中三人、以上五人尼に成被申候旨」とあるように剃髪した。剃髪した女中は、江戸城の二の丸や御用屋敷などへ移ったと考えられ、手当ては幕府より退職手当や年金などが支給された。そして、女中の最上位であった大上臈おさよの方は、「御守殿被相勤候大上臈公義へ被召出、豊岡殿と被改、御守殿直ニ登城」とあるように、改名して江戸城へ帰城した。大上臈という役名は、大奥女中には見られない。そのため、「お」の字のつかない上位、御年寄の役に変わるための改名であったと言える。竹姫の入奥後、將軍吉宗付御年寄衆からの書状に「豊岡」の名が見えるため、將軍付御年寄になったと考えられる。御守殿付男役人は、御守殿に関する御用が終了した後、「光現院様附不殘被召返候旨、戸田山城守殿被仰渡」(光現院は松姫の死

後の諡)とあり、老中戸田忠真から御守殿付役人が幕府へ戻る旨が伝えられた。これにて、奥向き、表向きともに御守殿から幕府役人が去っていったことになる。(『御守殿一卷』)

(93) 前田家側御守殿付用人であった杉江・戸田・永原の三人は、帰国と暇を下され、白銀十枚と羽織を下賜された。そして、杉江の嫡子平之丞と戸田の養子与一郎が召出され、新知は二百五十石とされた。役は大小将に命じられたのだが、二百五十石の知行は大組頭の嫡子に与えられるものであり、この扱いについては、「奎左衛門清太夫儀ハ格別之品々候故」とある。(『御用所日記抄』享保六年正月廿五日条、二月廿二日条)

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程  
平成十七年三月修了)



表①: 松姫君様御附屬之女中

役名	人数	女中名	切米(石)	扶持(人)	針妙(人)	下女(人)
大上臈	1	おさよの方	80	8	7	5
介添	1	梅津局	70	8	5	4
小上臈	2	おえん御料 おきん御料	60	8	5	4
若年寄	4	戸波・みう羅 久米路・丸尾	40	5	4	3
中臈	6	おかね・おすけ・おたよ おもせ・およす・おいつ	35	4	3	3
小姓	3	おさん・おしん・おこん	30	4	3	2
表使	3	はきの・いな・あやの	30	4	3	2
右筆	3	おたね・おかん・おとり	25	4	3	2
次衆	6	おしめ・おれん・おとめ おゆり・おかし・おるつ	20	4	3	2
呉服衆	6	おふね・おすか・おかや おとせ・およね・おくね	22	3	3	2
盲女	2	おのち・おもち	22	3	2	2
三之間衆	3	おとき・おむく・おはく	19	2	1	2
末	2	おさよ・おそり	19	2	1	2
中居	3	染川・上巻・吉川	7	1	1	2
使番	2	雲井・藤波	7	1	1	2
半下	11	紅梅・斬半・よりき・みとく 若葉・柳・みさき・こすへ 楓・おはき・明石	5	1	—	1
右筆間小遣	2	おくる・おたん				
計	60				138	128

(「御守殿雑誌」より作成)

表②：竹姫君様附女中充行

役名	人数	女中名	切米	扶持(人)	薪(束)夏冬共	炭(俵)夏冬共	油(升)	五葉銀	湯の木(9月～4月)	湯の木(5月～8月)
大上臈	1	とみ	90石	8	20	15	3	200目1分	15宛	20宛
小上臈	1	てり	25石40両	5	15	10	2	170目	13宛	17宛
大年寄	1	岡田	80石	7	10	6	2	124匁2分	9宛	10宛
局	1	局	25石40両	5	15	10	2	170目	13宛	17宛
年寄	1	藤え	25石40両	5	15	10	2	170目	13宛	17宛
若年寄	3	岩田・高野	15石30両	4	10	6	2	124匁2分	9宛	10宛
		清崎	10石27両	3	10	6	2	124匁2分	9宛	10宛
中臈頭	1	野崎	12石28両	3	10	6	2	124匁2分	9宛	10宛
中臈	7	かん・りゑ・るり・つれ	10石27両	3	10	6	2	124匁2分	9宛	10宛
		みを・すわ・れん	35石	4	10	6	2	124匁2分	7宛	7宛
小性	2	ちさ・さゑ	30石	4	10	6	2	124匁1分	7宛	7宛
表使	3	森田	30石	4	10	6	2	124匁2分	7宛	7宛
		早川・成海	8石20両	2	10	6	2	121匁2分	7宛	7宛
右筆	3	りさ・りを・こま	25石	4	10	6	2	121匁2分	7宛	7宛
次頭	1	浅野	8石20両	2	10	6	2	121匁2分	7宛	7宛
次	4	はや	8石17両	2	8	(夏)3(冬)5	1	100目	6宛	6宛
		はま・ろく・つや・さわ	7石17両	2	8	(夏)3(冬)5	1	100目	6宛	6宛
呉服之間	6	さわ・とも・りう	7石17両	2	8	(夏)3(冬)5	1	100目	6宛	6宛
		たみ・さと	22石	3	8	(夏)3(冬)5	1	100目	6宛	6宛
		つよ	6石13両	2	8	(夏)3(冬)5	1	100目	6宛	6宛
ござ	1	こり	7石20両	2	8	(夏)3(冬)5	2	100目	6宛	6宛
三之間	5	ふさ・きん	6石13両	2	8	(夏)3(冬)5	1	100目	6宛	6宛
		ふり・とま・かな	19石	3	8	(夏)3(冬)5	1	100目	6宛	6宛
末	2	不明	6石10両	2	8	3	1	40目	6宛	6宛
中居	3	不明	5石6両	2	6	2	1	25匁	6宛	6宛
使番	3	不明	4石2両2分	1	3	—	0.5	12匁	2宛	2宛
右筆小間遣	3	不明	5石	1	3	—	0.5	12匁	1.7宛	1.7宛
はした	12	不明	3石2両	1	3	—	0.5	12匁	2宛	2宛
計	65									

(『鹿児島県史料旧記雑録追録三ノ二』より作成)

表③：鶴姫付女中(貞享二年)

役名	人数	女中名	切米(石)	扶持(人)	薪(束)	炭(俵)	油(升)	五葉銀(匁)	湯の木(束)
大上臈	1	右衛門左	70	7	40	15	3	18	50
小上臈	2	やち・そね	50	6	45	15	3	18	40
介添	1	瀧野	100	8	60	15	6	18	70
局(乳人)	1	「御局」				不明			
年寄	4	ふか野・むらせ ひろせ・なるを	30	4	40	15	3	18	25
中臈頭	1	あさ田	25	4	40	15	3	18	25
中臈頭並	1	はやま	25	4	40	15	3	18	25
中臈	6	かく・まち・つね はや・なる・れい	20	4	40	—	3	18	25
小性	5	もよ・から・せう こん・とめ	15	3	24	—	—	15	25
表使頭	1	中川	23	4	40	15	3	18	25
表使	2	山田・磯野	20	4	40	15	3	18	25
右筆頭	1	ため	20	4	40	—	3	18	25
右筆	2	より・きち	18	4	40	—	3	18	25
次	5	ほり・みつ・いし とま・やつ	13	3	24	—	1.5	15	20
呉服の衆頭	1	みね	15	3	24	—	3	15	25
呉服の衆	6	ゆか・さい・みる みな・たか・もと	13	3	24	—	1.5	15	20
三の間頭	1	なか	13	2	24	—	1.5	15	15
三の間	4	かる・さき・ひさ・たつ	10	2	24	—	1.5	15	15
ござ	2	もん・らん	15	3	24	—	1.5	15	25
末頭	1	あや	12	2	24	—	3	15	15
末	3	しま・とや・まさ	10	2	17	—	—	9	15
中居頭	1	藤波	10	2	17	—	—	9	15
中居	3	梅かえ・夕きり・桐登	8	2	17	—	—	9	15
使番	3	不明	5	1	9	—	—	5.4	5
はした	15	不明	5	1	9	—	—	5.4	5
計	73								

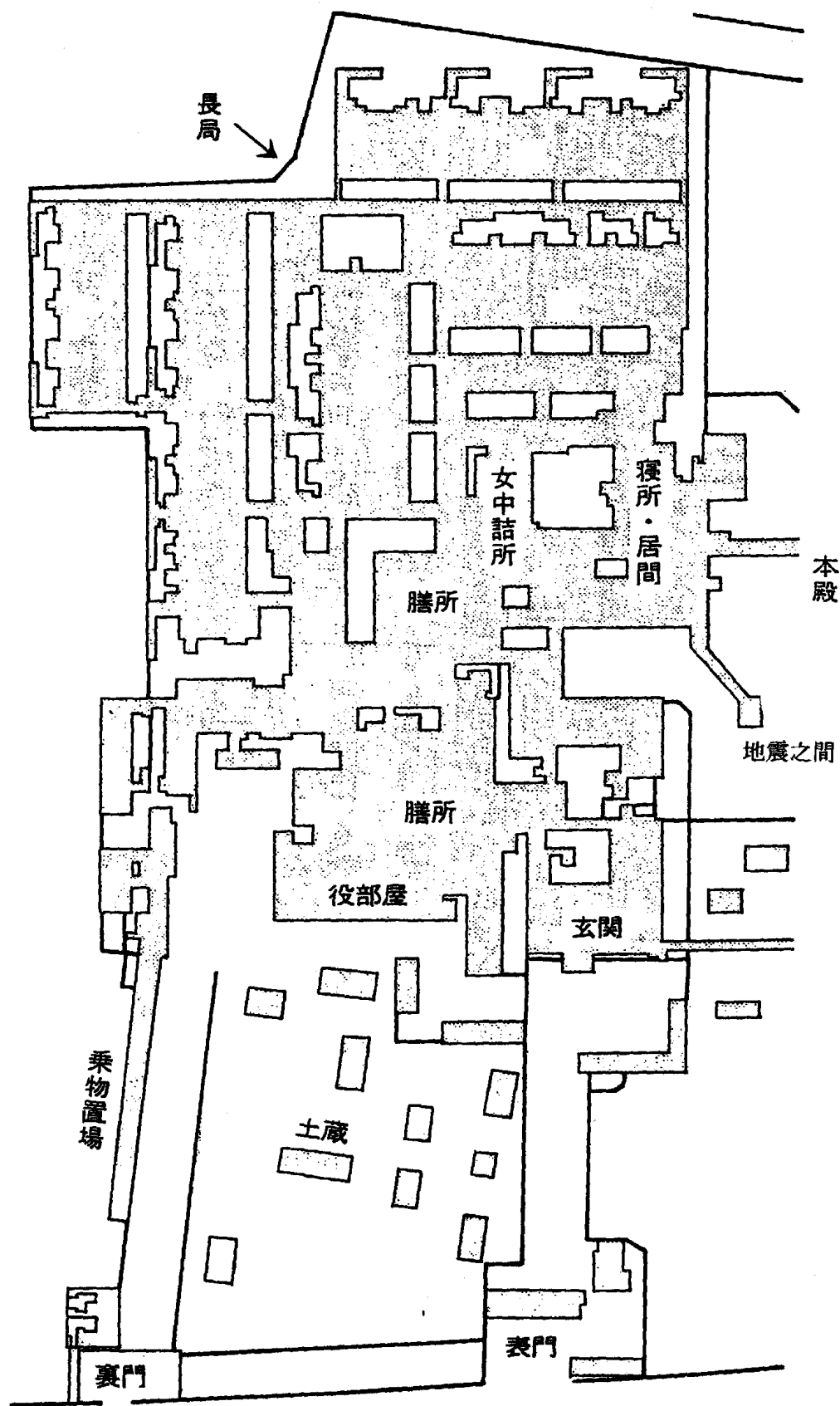
(出典：宮崎氏「紀尾井町遺跡における大名屋敷の様相とその変遷」)

表④：姫君付女中職制比較

役	松姫Ⅰ	松姫Ⅱ	鶴姫	竹姫	淑姫	溶姫
上臈年寄						1
大上臈	1	1	1	1	1	
介添	1	1	1		2	
小上臈	2	2	2	1	1	
局		1	1(乳人)	1		
大年寄				1		
年寄			4	1	2	2
中臈年寄						1
中年寄					3	2
若年寄	3	4		3		
中臈	6		8(頭・並含)	8(頭含)	9(頭含)	6
小姓	3	3	5	2	1	1
表使	3		3(頭含)	3	3	2
右筆	3	3	3(頭含)	3	3	3
次衆	6	5	5	5(頭含)	6	5
呉服衆	6	7	7(頭含)	6	5	3
盲女	2	2	2	1		
三之間衆	3	5	5(頭含)	5	7	5
末	2	2	3	2	2	2
中居	3	3	4(頭含)	3	3	3
使番	2	3	3	3	3	3
半下	11	15	15	12	17	10
右筆間小遣	2			3	3	
計(人員数)	59	67(57)	73	65	71	49
職制の数	17	18(Ⅰを含め)	17	19	17	15

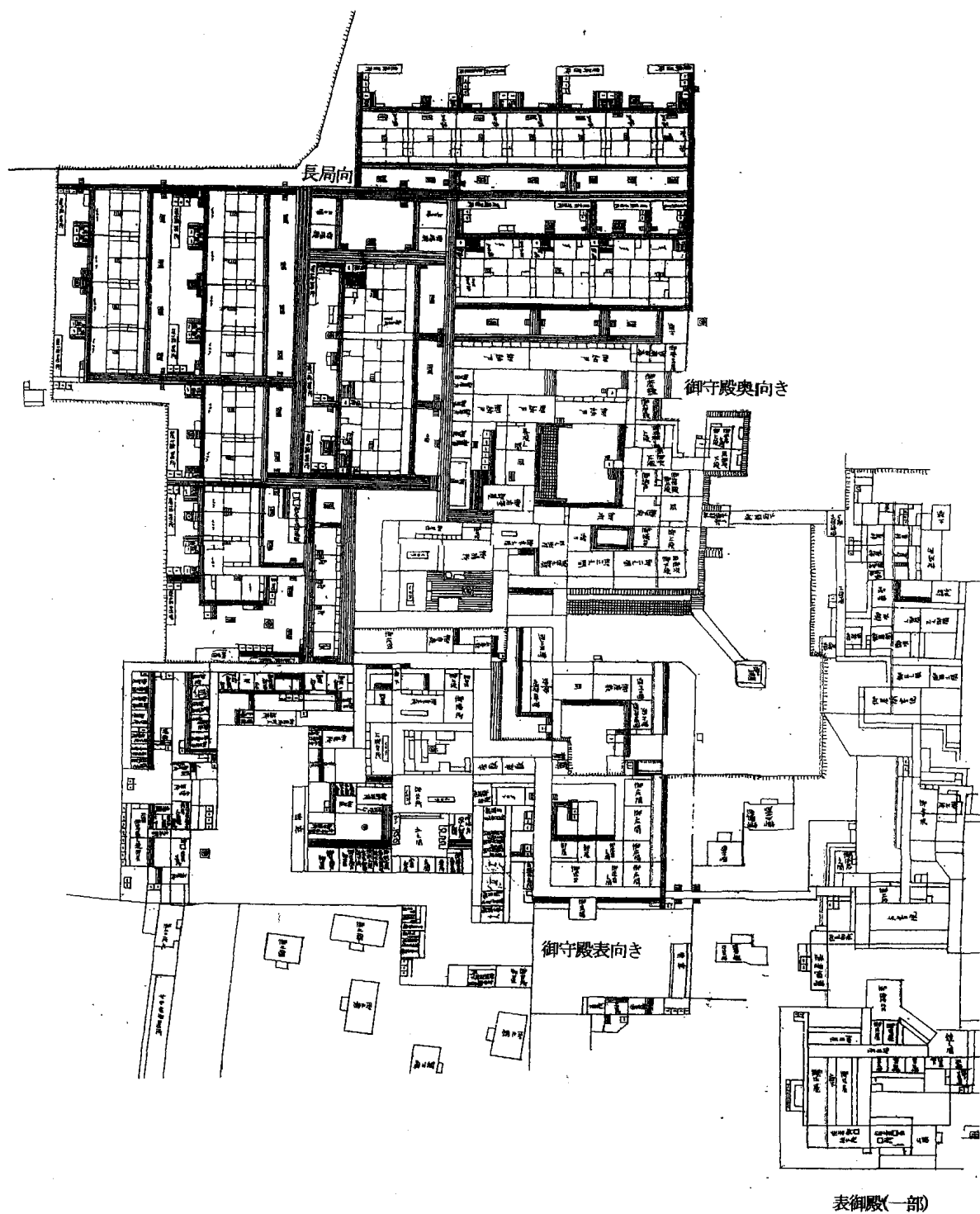
(表①・②・③、出典：宮崎氏「紀尾井町遺跡における大名屋敷の様相とその変遷」、畑氏『江戸奥女中物語』より作成)

(松姫Ⅰは、入興前の書付より作成。松姫Ⅱは、入興後の書付より作成。)



図① 加賀藩本郷邸松姫守殿図

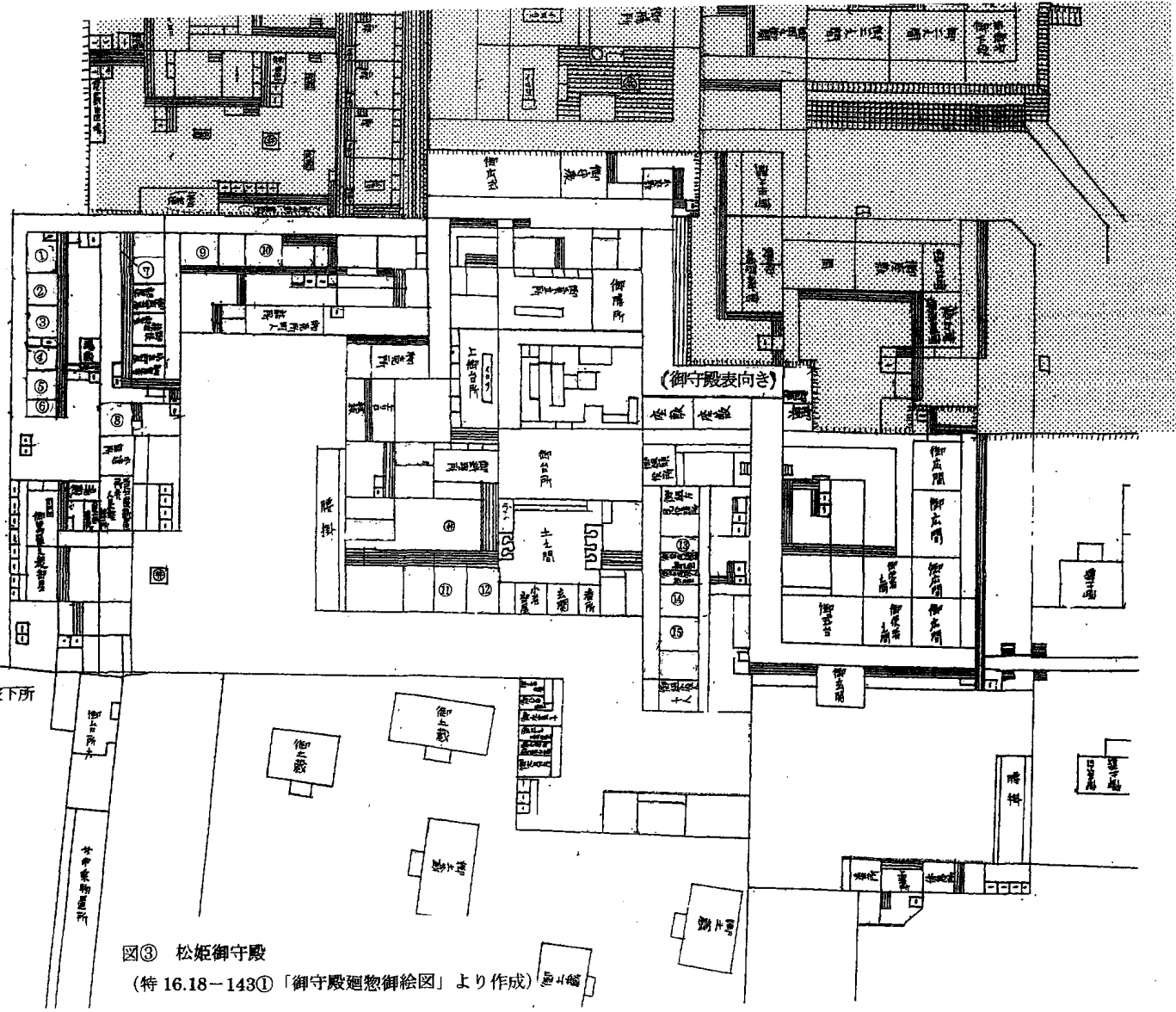
(出典『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』 p 698)



図② 松姫御守殿

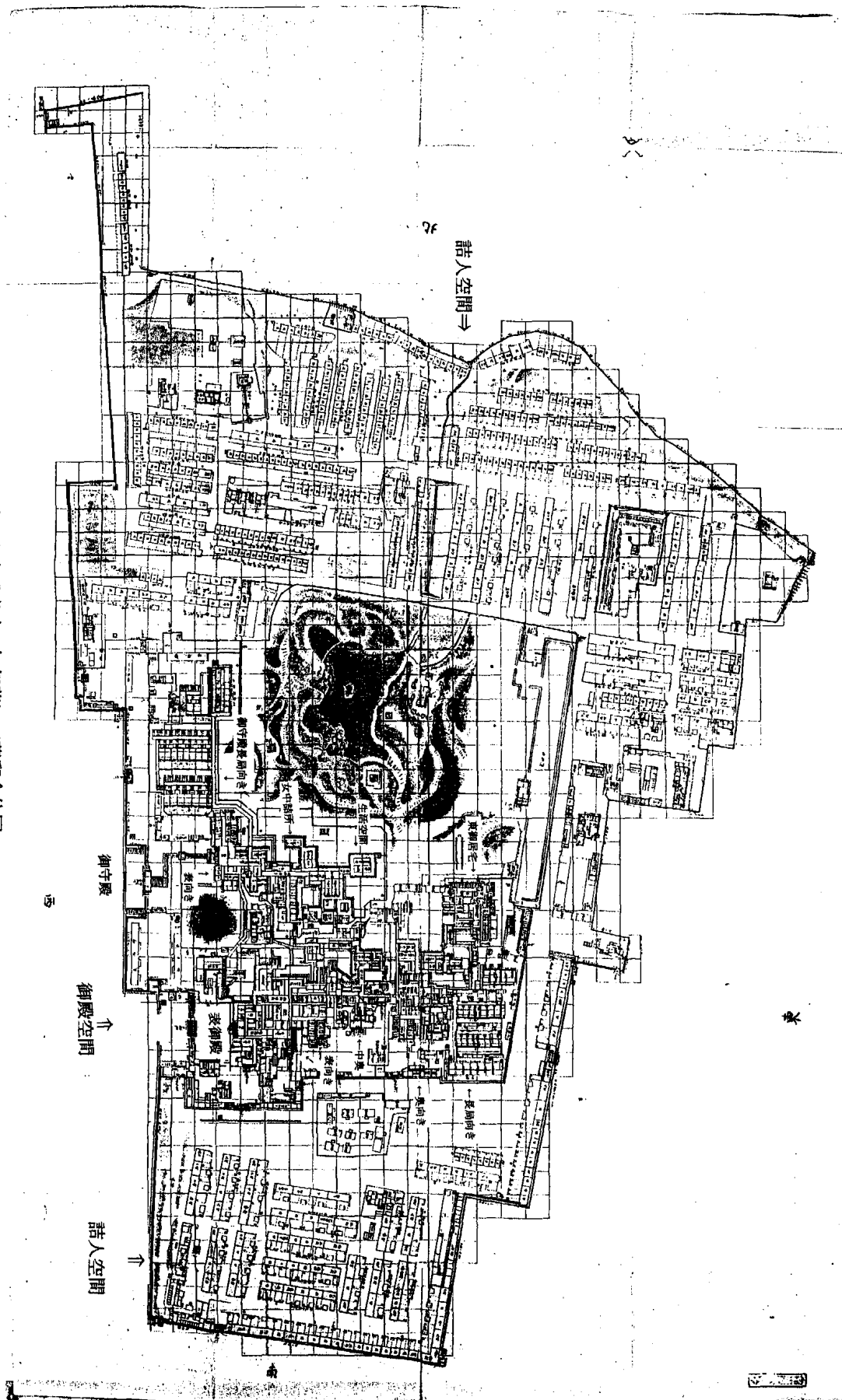
(特 16.18-143①「御守殿廻惣御絵図」より作成)

- ①・② 御医師部屋
- ③・④ 岡村丈庵(下)部屋
- ⑤ 三宅忠七郎下部屋
- ⑥ 村塚道阿弥部屋
- ⑦ 杉村左左衛門  
戸田清太夫 部屋  
土田甚左衛門  
横山喜太夫
- ⑧ 川副新右衛門下部屋
- ⑨ 川副新右衛門部屋
- ⑩ 御侍衆部屋
- ⑪・⑫ 御附之衆家来御料理被下所
- ⑬ 上村新右衛門下部屋
- ⑭ 御小間遣御道具置所  
但 二階御小間遣部屋
- ⑮ 溝口惣次郎  
飯塚式左衛門  
市川権七  
木村平八 部屋  
山田藤太夫  
萩原新吾

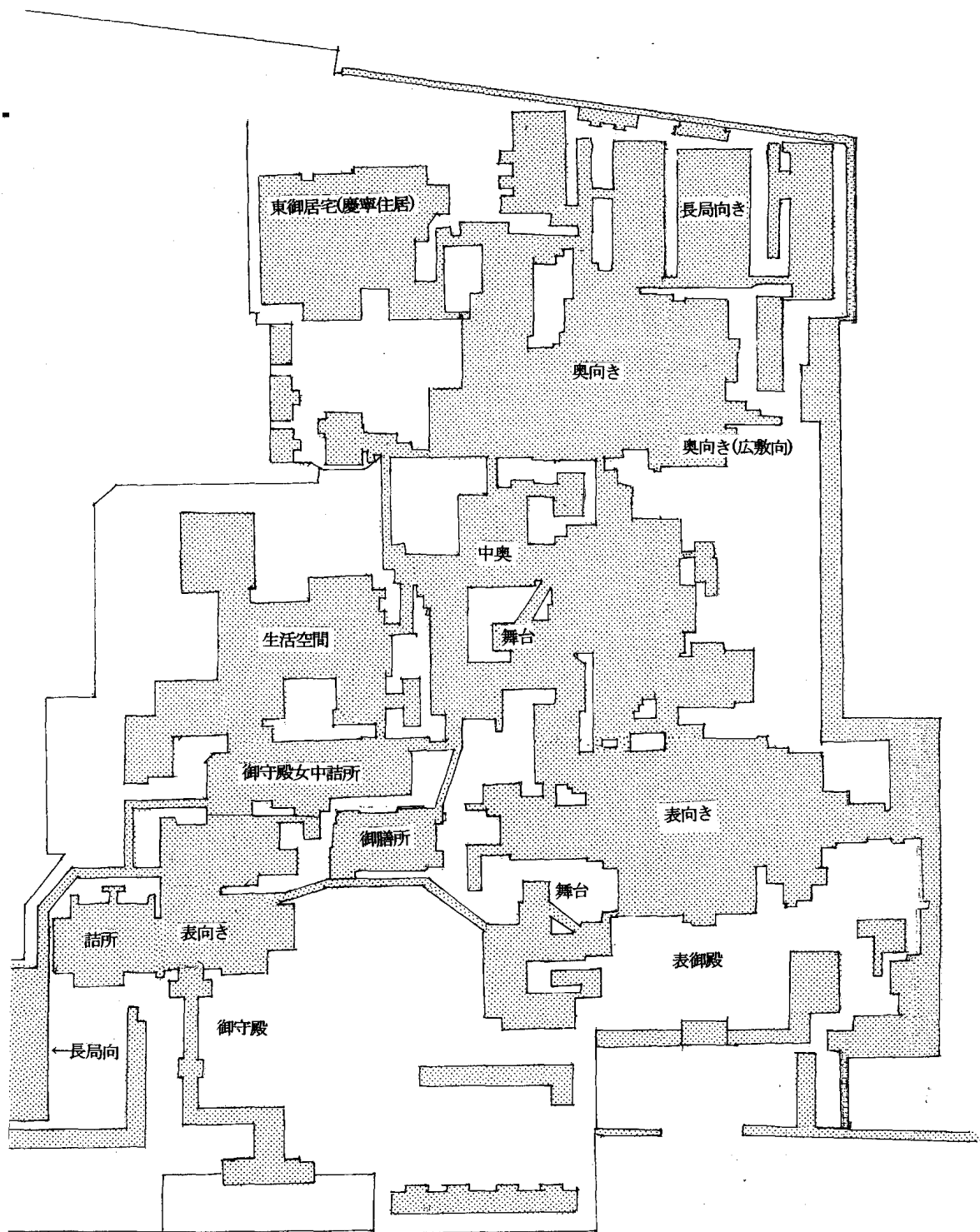


図③ 松姫御守殿  
(特 16.18-143①「御守殿廻窓御絵図」より作成)

図④ 溶炬御守殿当時の加賀藩江戸藩邸全体図  
 (18.6-27①「江戸御上屋敷惣絵図①江戸御上屋敷絵図」)







図⑤ 溶姫御守殿・表御殿

(18.6-27①「江戸御上屋敷惣絵図①江戸御上屋敷絵図」より作成)